

〈書評〉

Assia Djebar : *Le blanc de l'Algérie*,

Albin Michel, 1996

石田靖夫

1936年アルジェリアのシェルシェルに生まれたジェバルの新刊本について語る前に、少し長いものになるとはいえ、ある引用からはじめることにしたい。

「〈フランス〉とは何か。数年前からわれわれの政治演説と文化政策にふたたび憑きまどっている——それは偶然からなどではない——この問いに対して、各自、党派の利害と歴史上の解釈とを組み合わせることによって、多かれ少なかれ複合した自分なりの答えをもちよっている。私も、そのような答えを一つ提案することにする。その答えは、すべてを言ってしまうと豪語する——そんなのは、ばかげた野望に他ならない——ものではない。そうではなく、フランスというのは、分かちがたく、フランスによる植民地化のことであるという、われわれの歴史のなかで最も強力なタブーを、できれば正面から見すえはじめたいのだ。(中略) 植民地化のことを、六角形の形をしたフランス本土の歴史に追加されることになるような〈外的な=対外的な企て〉として表象すること、あるいは、嘆かわしいものであれ栄光にみちたものであれ、とにかく長い年月にわたってはいるが、いずれにせよ一時的なエピソードとして表象することほど、間違っているものはない。もしも植民地化がフランス本土の歴史に追加されたものであるのなら、その歴史は、(みずからの運命とまでは言わないが) みずからの意味を自分自身のうちにもっていることになるだろうし、もしも植民地化が一時的なエピソードであるというのなら、そのエピソードは、1945年から1962年にかけて本質的には完遂された脱植民地化とともに終わっていることになるだろうが、そうではないのだ。これは、『レ・タン・モデルヌ』誌の特集号「フランスにおけるマダガスカルからの移民」(1984年3・4・5月合併号)に収められている論文「主体(=臣民)それとも市民?(平等のために)」のなかで、エチエンヌ・バリバルがもっとも本質的な事柄をそのものずばり指摘した言葉(p.1740)である。1962年とは、言うまでもなく、アルジェリアがフランスから独立した年である。バリバルによれば、移民問題というコンテクストのなかで、植民地化の構造がフランス社会のなかに内面化された、したがって、それだけにはっきりと意識しないですませられるような形であくまでも温存されているというのだ。フランスによるアルジェリアの植民地化の歴史過程がどれほどすさまじいものであったのかを想像するには、たとえば、「秘密武装組織」の暴虐振りを垣間みるだけで十分だろう。「秘密武装組織」は、1960年から翌年にかけての冬に作られたフランス極右の民間テロリスト・グループであった。1961年4月22日か

ら25日の「将軍たちのブッチ」の失敗後、そのブッチに加わった4人の将軍のうちサランとジュオーの両将軍、ならびにその配下の将校がそこに合流し、サランがそのリーダーになる。未遂に終わったとはいえ、アルジェリアの独立を容認する方向に傾いていったド・ゴールを暗殺しようとしたのは、この組織であった（1961年9月9日とアルジェリア独立以降の1962年8月22日）。ここには、フランスの国家像をめぐってフランス人自身の間に生じたアイデンティティの葛藤が復讐となって露呈している。「秘密武装組織」は、どのみちアルジェリアが独立するのなら、アルジェリアを1830年の現状にまで、すなわち、フランスによる植民地化当時の現状にまで後戻りさせるために、組織的な破壊活動を行ったばかりではない（日本の右翼政治家のなかに、中国における重化学工業が発展したのも、旧満州の日本人による設備投資があったからこそであって、日本も「良いこと」をしたのだと妄言を吐く輩がいることを指摘しておこう）。土壇場になって本国に帰ろうとするまさに同胞のフランス人に対してさえ、殺すと脅したのだった。それでは、独立を達成した今のアルジェリアはどうか。それほどまでに熾烈をきわめたフランスによる植民地化の経験は、今度はアルジェリア人同士がアイデンティティをめぐって血で血を洗う闘争に陥っていることになかに残響しているのである。植民地解放戦争において賭けられていたのは、フランス的なものに関する記憶とアラブ的なものに関する記憶との葛藤において最もラディカルな分割線を書き込むことであって、その書き込みは、他ならぬその当事者を無傷のままにはおかない。なぜなら、フランス的なものに関する記憶は、すでに暴力の書き込みを前提しているわけだから、それをぬぐい去るには、書き込みの暴力が当のアルジェリア人に対して二重、三重に、要請されるからである。たとえば、戦争中に、マヌ率いるパラシュート部隊によるアルジェリア人の拷問が行われる一方で、ブースフ配下のアミルーシュの命令のもとで、同胞のアルジェリア人が同じように拷問にかけられることになる。

ジェバルの『アルジェリアの（空）白』は、痛切の一語に尽きる。

まず、その最終章「アルジェリアの（空）白を書くこと」について。アルジェリアの白と言えば、国旗（緑は繁栄を、赤は殉教者の血を、「白」は平和と純潔を、それぞれ意味する）、女性の民族衣装、家の色として「白」がまず思いうかぶにちがいない。事実、本の表紙は裏表とも、薄く透明感のある緑色であり、著者名、著書名、出版社名、そして本書の短い紹介文は、いずれも白で印刷されている。特に、表の方には、全体に緑がかった白い建物の向こう側に数人の青年が黒いシルエットとしてあしらわれ、こちら側の前景には、これまた緑がかった白の民族衣装を着た二人の女性が並んで歩いている。だが、ジェバルの言説は、そのような紋切り型の安逸に浸っているわけではない。そこにはまさに死の「暗黒」が支配している。語られているのは、友人、知人、近親者といった同胞の死なのである。病死や事故死から「秘密武装組織」による暗殺まで、あるいは、自殺から「神に酔いしれた狂人たち」（イスラム原理主義のテロリスト）による暗殺まで、様々な死が「表白」されている。「白」は、フランス人とアルジェリア人の双方のテロリズムで殺された者たちを指す「標的の白丸」でもある。この「暗黒」に取り囲まれた「白」というかむしろ、「暗黒」と見間違えるほどの「白」。そのような「暗黒」が書き込まれる行間の「白」と活字の「黒」。中心として公式の記憶に祭り上げられることのない内密な「余白」の記憶の領域。

アルジェリアの脱植民地化闘争の名において死者たちを殉教者として記念する身振りそのものが、「空白」を埋めるどころか、逆にそれを刻印することでしかないような権力の倒錯した「白々しさ」。「ぐらついているアルジェリア、さらには、ある者たちの手によって経帷子の白が用意されているようなアルジェリアのことを述べるためのエクリチュール」(p.272)。ジェバルはみずからに問う。「なぜ、アルジェリアというこの地で、それも、まさしく95年というこの年に、私はこれほどまでに死(神)——あの黒くて純血種の馬——とエクリチュールとの接合にとり憑かれているのだろうか」(p.261)と。「今日、アルジェリアにおいて、作家、ジャーナリストそして知識人が次々と殺害されてゆくとともに、それに呼応して圧制——どんな犠牲をはらってでも権力をにぎろうと決意した宗教的教条主義アンテグリスムに対抗して、振りかざされる唯一の政策——もいや増すばかりの事態を経てからというもの、つまり、痙攣をきたしたあの紛糾が私の国のある戦争へと投げ込んでおきながら、当の戦争は実名で名乗られず、暴力と麻痺させるような暴力の語彙とのあの回帰において、新たに《事件=出来事》という名前をあたえられているのを前にして、《白》(埃=遺灰の白、太陽の出ていないときの光の白、稀釈の白)とは何か、なぜここで白のことを述べるのか」(p.271)。今のアルジェリア政府軍とGIA(「イスラム武装グループ」)の間で戦われている血みどろの内戦が、彼女の言うように「事件=出来事」と呼ばれているのであれば、これほどのアイロニーは他にないだろう。なぜなら、かつて「アルジェリア戦争」は、周知のように、「フランスのアルジェリア」を標榜する本国政府によってまさにそう呼ばれていたからである。そして、彼女は答える。「私としては、この色、この非・色を参照することによってしか、作家としての、アルジェリア人女性としての自分のいたたまれない不安を表現することができない。《白は、絶対的な沈黙がそうであるように、われわれの魂に働きかける》と、カンディンスキーは言ったものだ。こうしてまさに、私は、抽象絵画のことをこのように思い返すことで、いわば強制追放された言説をおびきよせつつある」(p.271)。(『アルジェリアの(空)白』は、「物語」と名うたれているのだが、そこで語られている人間は、実名で登場する。このことの意味が何であるのかを論究するのは、私の手に余る問題なので、ここでは放棄することにしたい。)

ジェバルがそのようにして「おびきよせた」語りを通して「表白」する個々の死者たちのなかで、一人だけを取りあげたい。第3章「未完の死」のなかの「独立後の亡霊」において語られているアバーヌ・ラムダヌである。それは、ラムダヌの「死」を通してジェバルが今の「アルジェリア問題」、つまり、同胞の間での兄弟殺しという胸をかきむしられるような惨状に対して、バリバルの言葉を使って言えば、「正面から見すえ」ようとする意志をはっきりと示しているからである。あたかも、それこそが希望であるかのように。

ジェバルは、1954年11月1日にはじまるアルジェリア戦争のなかで1957年という時期にこたわる。1956年10月から1957年4月まで解放闘争のリーダーであったラムダヌが、1957年12月下旬に、権力闘争に巻きこまれ、仲間のクリム・ベルカセム、マームド・シェリフそしてブースフの陰謀によって殺されたのだった。しかし、ラムダヌの死は名誉の戦死であったということにされる。「今度は、暗殺された者の幽霊そのものを絞殺する」(p.146)メカニズムがこうして始動する。当然、彼の死の真相は公式には隠蔽されたまま。ところが、60年代の中頃、故郷の村に

ある彼の墓のまわりで、故人をたたえる式典が行われる。クリム・ベルカセムも出席し、齒の浮くような演説の最中にラムダーヌの弟（それとも兄）の発言がきっかけとなって、思わず「この件に関しては、私だけではない」（p.148）ともらしてしまう。式典に出席していたある人物の評語——「われわれの革命のなかで何かが腐っているのだ」（p.149）。それから数年後、ベルカセムは、ドイツのホテルの一室で死体となって発見される。1984年、アルジェのエル-アリア墓地でのこと——「今度は、ラムダーヌは、すぐ近くに……、彼の殺害者であるクリム・ベルカセムのすぐ近くに埋葬され、後者は、ブーメディエンの堂々たる墓から遠くないところに安置される。ブーメディエンはと言うと、要するに、殺害者の殺害者なのである……。他にも何人かいるなかの3人の英雄。その一人一人の面前に、と同時に、3人全員の面前にも、アルジェで次々に後を継いだ政府要人たちが毎年11月1日、敬意を表しにやってきては、〈11月の誓い〉を新たにするのである」（p.149）。死の記憶を共同体の解放の未来に向かって刻印しようとする権力の儀式そのものが、逆に、それを「空白」として塗りこめるような記憶の死に陥ってしまうことの逆説を、ジェバルは衝いているのだ。「〈神に酔いしれた狂人たち〉が、今日、たとえ正規の方向から逸れた、たとえその方向を踏み外した反抗、怒りだとはいえ、当初からすでに *chahids*、すなわち、かつて犠牲となった者たちの墓地や墓に攻撃をしかけたとしても、どうしてそのことに驚くことがあるだろうか」（p.150）。死者を死者として未来に向かって解き放つことが、どれほど難しいことか。それは、同時に生者がみずからの過去を呪縛からいかに解き放ちうるかにかかっている（靖国神社の「英霊」とその陰画である「従軍慰安婦」を思いかえすこと！）。そして、フランス人とアルジェリア人との「植民地戦争であるにもかかわらず、そのただ中で当の戦争を内戦として（……）生きるという奇怪な裂け目を感じとったのは、まさしくカミュが最初である」（p.133）と指摘する彼女は、ラムダーヌ暗殺のなかに、現在の兄弟殺しを二重写しに見るのである。一旦ひび割れた記憶の裂け目は、欺瞞のなかでさらにもっと深く内側に折れまがってゆき、その深まりに呼応して暴力もますます激烈になるだろう。植民地化の刺は、脱植民地化に継承されてそこにある。自由の問題を考えると、この20世紀の袋小路と化した経験は、避けて通ることのできない最も本質的な問題として目前にたちはだかっている。